

この他、ここ10年余り毎年見ている木に梅津の真法院の苔梅があります。幹周2.57cm、樹高10m（伊藤邦男佐渡巨木と美林の島より）という大木で、佐渡で一番大きな梅ノ木です。花は薄いピンクの八重咲きで、彼岸の入りの頃にまだ蕾の固い年と少し開く年とがあります。ところが、今年は2月23日、すでに蕾がふくらんでいて、早いのに驚きました。しかし、このあとの冷え込みで3月18日彼岸の入りによっと3分咲きとなり（例年よりは早いのですが）、26日頃になって満開に近づきました。長くかかっ

たわりには花数も多くまあまあの咲きぐあいでした。その近くにはいつもは早く咲く一重の白梅があるのですが、今年は苔梅と同じ頃、満開になりましたが、いつもは純白の花なのに、かなり濃い赤味の混じった花が多く見られました。開花近くなってから強い寒さがきたせいなのでしょうか。

あやふやな記録ですが、見たこと、気になったことを書いてみました。

フジキの開花

石 沢 進

フジキは、新潟県新井市の高床山で分布の北限である。津南町の中津川沿いの逆巻付近には群生している。そのフジキは1998年前に一斉に開花したことがあり、その後開花した形跡がなかったが、本年7月7日に開花したとのことで、中沢英正氏の案内で現地の開花状況を確認した。本種は、開花時には山の斜面に点在する様子が、樹一面に白い花が咲くので、遠くから見てもよく分かる。逆巻付近の中津川左岸に本数が多く、右岸に少ないようである。

ブナと同じようにフジキも豊作年があるようで、本年はその年にあたり、枝の各所に多数の花をつけていた。津南のフジキの開花記録をたどると、1993年7月6日に開花した写真が「津南町の自然—植物編—」に掲載されている。その時に一斉開花したことは明らかでない。その5年後の1998年に一斉開花し、本年（2007年）に再び一斉に開花して最初の開花記録の14年目、前回の一斉開花の9年目に当たる。開花の周期性については、さらに記録を重ねないと明らかではない。本年7月7日には、花の終わりかけた個体が多いようであった。



写真 開花株 中津川左岸 (2007 7 7)

2007年(平成19年)3月2日(金曜日)

新 潟 日 報

気象庁は一日、記録的暖冬だった今冬（昨年十二月〜二月）の天候まとめを発表した。平均気温は、全国百五十三観測地点のうち新潟、佐渡（相川）、仙台、東京、名古屋、大阪、福岡など七十五地点で観測史上最高（過去タイの十二地点含む）。二位が三十一地点、三位が十三地点と、全体の約78%に当たる地点で過去三位以内の暖かさだった。（関連記事34面）

歴史的暖冬

気象庁によると、今冬と、日照時間は県内二十の平均気温は佐渡市（相川）が六・三度、新潟市が五・四度といずれも平均を約二度上回り、それぞれ統計開始の一九二一年、一八八七年以降最も高かった。上越市（富田）も四・八度で、過去三番目の高さだった。新潟地方気象台による、長期的な気候変動

平均気温 75地点で過去最高

原因として気象庁は①北極圏が寒気を蓄積・放出する「北極振動」が寒気蓄積期だった②エルニニョ現象③地球温暖化を挙げている。

期間中の降雪量は、平均で二四一センチの佐渡市が「一センチ未満」、同二八センチの新潟市は五センチ未満、全国二十地点（前年までの最少が一センチ未満の地点除く）で観測史上最少を記録した。

計の残る一九四八―四九年降で一九四八―四九年冬と並び最高を記録。同庁は「観測史上トップ級の暖冬だった」としている。

七観測所のうち、一月が長野など十七地点の冬の平均気温は平均（一九七―二〇〇〇年の平均）を一・五度上回り、統計の残る一九四八―四九年降で一九四八―四九年冬と並び最高を記録。同庁は「観測史上トップ級の暖冬だった」としている。

サクラサク、記録的乱れ

この春、桜の開花は東京が一番乗り。鹿児島よりも金沢が一足先に開花した。桜前線が大きく乱れたのは記録的な暖冬の影響らしい。そんな中、桜の開花予想はこれまでの中としたのだろうか。このまま温暖化傾向が続けば、予想はますます難しくなりそうだ。(大久保泰)

暖冬続き予想ほころぶ

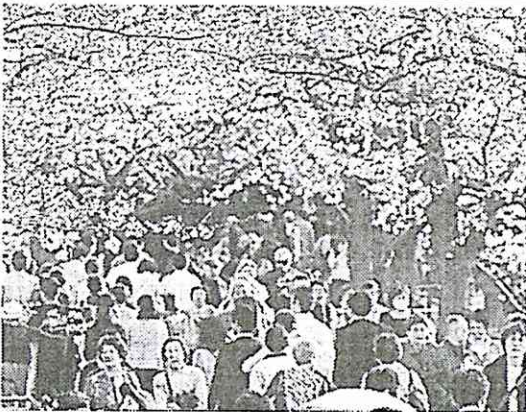
気象庁が最初の開花予想を発表したのは3月7日。その時点での主な地点の予想日と実際の開花日は表の通りだ。日本気象協会は東京都心、京都市、広島市、金沢市でびたりと当てた。予想日との誤差を合計してみたのが「誤差日数」で、ここでも勝っている。同協会の開花予想を担

当したのは中堅の平泉浩一さん。気象予報士と統計士の資格を持ち、各地の過去46年間の気温と開花日の相関式を独自にはじき出した。それでも、西日本などで予想より開花が遅れた。「記録的な暖冬の影響が読みにくかった。予測式を見直しませう」と意欲を見せる。ウエザーニュースは、

各地のモニターから携帯電話のカメラでつぼみの発育状況を送ってもらった。「暖冬の年は予想が難しい。今年築いた仕組みをさらに充実させる」

迷走を続けたのが気象庁だ。1回目の予想を発表した後、各地の気温データが誤って入るプログラ

これまで 財団法人の日本気象協会が今年初めて、桜の開花予想に参入した。5年目を迎えた気象情報会社のウエザーニュース、本家の気象庁と三つの予想が出せらる中、半世紀の実績を持つ気象庁の予想に3月、プログラムミスが見つかった。同庁が謝罪会見を開くなど、今年の開花予想は波乱含みで始まった。



満開の桜を見に来る多くの観光客が訪れた—東京・上野で、細川卓撮影



ラムミスが判明し、4カ所の予想を修正する事態になった。

桜の開花予想は1995

予測地	気象庁	ウエザーニュース	日本気象協会	開花日
新潟市	4月3日	4月3日	4月1日	?
金沢市	3月31日	4月1日	3月29日	3月29日
前橋市	3月29日	3月24日	3月24日	3月28日
東京都心	3月21日	3月19日	3月20日	3月20日
静岡市	3月19日	3月25日	3月22日	3月24日
名古屋市	3月20日	3月22日	3月20日	3月23日
京都市	3月28日	3月27日	3月25日	3月25日
大阪市	3月25日	3月22日	3月24日	3月27日
広島市	3月25日	3月23日	3月22日	3月22日
高松市	3月26日	3月22日	3月24日	3月28日
福岡市	3月20日	3月19日	3月19日	3月21日
鹿児島市	3月31日	3月23日	3月25日	3月30日
誤差日数	24日	33日	23日	

気象庁が最初の予想を出した3月7日の時点での予想。ただし、同庁の東京都心や静岡市などのデータはミスがあったため、修正後の1回目の予想日にしてある。誤差日数は、開花日との差を累計した

5年に全国の気象台で始まる。つぼみを切って重さを量り、職員が経験を生かして予測する職人芸の仕事だった。96年からコンピュータを使う、前年9月からの気温や今後予想される気温のデータを入れて、本庁が一括して全国各地の予想を出すようになった。

ところが05年、予想が大きく外れた。それまでは過去50年のデータを参考にしてきたが、近年の暖冬傾向とは合わなくなってきたからだ。そのため昨

年、暖冬の年のデータを生かしたプログラムに変えた。この時、気温を取らねばならぬプログラムに不具合があり、誤ったデータが入るようになった。同庁は昨年とはまたまミスが起ころなかつただけと明かす。こうした波乱も、暖冬傾向が招いた余波と言える。

今年の予想的中結果からは、開花日が近づき、つぼみのほころび具合がわかっていてもコンピュータの結果だけを伝える「ハイテク予想」の弱点も浮き彫りになる。しかし、同庁の平木哲長官は「開花予想は咲く直前になって伝えてもあまり適切ではない。現在の手法で特に悪いとは考えていない」と語り、見直す考えはないようだ。

大阪府立大生命環境科学研究所の青野靖之准教授(農業気象学)によると、5〜7度の低温が延べ800〜千時間あると休眠打破が進む。十分な寒さがなくても休眠打破は始まるが、後の成長に時間がかかるという。今年の記録的な暖冬が、その現象を招いたようだ。

開花予想に使われるメイヨシノの南限は種子島や八丈島とされる。このまま暖冬が続けば、その南限は北上していくのだろうか。青野准教授は「1年の暖冬でどうこうはない。ただ、今年のような異常な暖冬が何年も続くと芽が出なかつたり、木が枯れたりする」ともありうる」と話す。

桜前線は3月29日に金沢市や福島県いわき市まで北上したが、鹿児島市は同30日と遅れた。桜は前年の夏に花芽が育ち、冬になって一定の寒さを経たから成長を始める。この「休眠打破」

桜前線は近い将来、東北から南下するようになるかもしれない。

森林総合研究所の勝木俊雄さんは「冬の低温、特に冷え込みが重要な役割を果たす。暖冬が続けばメイヨシノの南限が北上する可能性はある」。日本の桜前線が変わることもあるとみる。

桜前線は近い将来、東北から南下するようになるかもしれない。